

# 子どものがん薬物療法における 曝露対策

特集にあたって

## 子どもや家族とともに取り組む曝露対策をめざして

小児がんの子どもにとって薬物療法は、子どもの命を救うための必須の治療であるが、抗がん薬の多くは、発がん性、催奇形性、生殖毒性などをもっている。それらの薬物は、HD (Hazardous Drugs) と呼ばれ、毒性に対する安全な取り扱い(セーフハンドリング)が求められる。欧米では、1980年代から曝露対策の指針が示され法的整備もなされてきているが、わが国においては1990年代から欧米の動きを受けて曝露対策が注目されはじめ、2015年および2019年に日本がん看護学会、日本臨床腫瘍学会、日本臨床腫瘍薬学会が合同で、職業性曝露対策の観点からのガイドラインを刊行し、わが国の曝露対策を推進してきた。

しかし、2つのガイドラインともに、子どもへの薬物投与や子どものケアにおける曝露対策の課題に言及した内容はほとんどなく、治療中の幼児の排泄物や吐物の取り扱い、発汗時の対応、環境汚染などの問題は、いくつかの施設での取り組みが学会にて発表されてはいるものの、子どものがん薬物療法における曝露対策として、系統的に検討されるという状況には至っていない。

近年、成人と同様に、子どものがん治療も、入院や外来、在宅など多様な場でなされるようになり、HDを扱うのは医療従事者だけでなく、子ども自身と子どもを身近で世話する家族や、家庭以外で過ごす場で子どもの世話をする人々にも影響を及ぼす。セーフハンドリングを実施するためには、医療従事者だけでなく、子ども自身や家族、子どもを世話する保育士なども含め、曝露対策の正確な知識をもち、身を守る防護具などを用いて行動することが必要で

ある。子どものがん薬物療法における曝露対策は、子どもを取り巻く多様な人々への教育的かかわりと子どもが過ごす日常の場に応じた必要な対策が求められる。

本特集では、わが国のがん薬物療法における曝露対策を最前線で推進してきた薬剤師、看護師の方々に、これまでのさまざまな取り組みや課題、基本的知識や具体的な実践方法などについて、その理由なども含め解説いただいている。これらは小児領域においても共通する職業性曝露対策の基盤である。また、小児がん医療の臨床の場で曝露対策に取り組んできた医師・看護師の方々に、小児医療における現状や曝露対策の調査、患者の発達段階に応じたかかわりや自施設での取り組みや課題について執筆していただいた。

子どものがん薬物療法における曝露対策においては、職業性曝露という観点も今後の課題ではあるが、さらに子どもと家族へのケアとしての観点も大きな位置を占めると考えられる。

本特集が、がん薬物療法を受けている子ども・家族や周囲の人々の安全と、臨床現場の医療者・多職種の安全を目指して、「子どもや家族とともに取り組んでいく曝露対策」を推進する一助になることを願っている。

内田雅代<sup>\*1</sup> Uchida Masayo 竹之内直子<sup>\*2</sup> Takenouchi Naoko  
平田美佳<sup>\*3</sup> Hirata Mika 白井 史<sup>\*4</sup> Shirai Fumi  
日本小児がん看護学会ケア検討委員会

<sup>\*1</sup> 東都大学幕張ヒューマンケア学部教授

<sup>\*2</sup> 元神奈川県立こども医療センター小児がん相談支援室/小児看護専門看護師

<sup>\*3</sup> 聖路加国際病院看護部/小児看護専門看護師

<sup>\*4</sup> 長野県看護大学看護学部助教